



FUKUOKA PREFECTURAL
UNIVERSITY

福岡県立大学 附属研究所

2020. 10

生涯福祉研究センター

事業報告書

2019（令和元）年度

福岡県立大学 附属研究所

目 次

| | |
|---|----|
| I 調査研究事業部門 | |
| 1. 2019年度 生涯福祉研究センター研究プロジェクト一覧 | 1 |
| II 地域支援事業部門 | |
| 1. お父さん・お母さんの学習室（ペアレントトレーニング） | 1 |
| 2. おもちゃとしょかん・たがわ | 2 |
| 3. 福岡県立大学福祉用具研究会 | 4 |
| 4. 子どもアドボカシーの養成と組織化のための理論及び実践モデルの研究（アドボチャイルド） | 7 |
| III 教育研修事業部門 | |
| 1. ペアレントトレーニングを応用した特別支援教育スキルアッププログラム | 32 |
| 2. 筑豊英語教員フォーラム | 34 |
| IV その他の事業 | |
| 1. 筑豊市民大学 | 35 |

I 調査研究事業部門

1. 2019 年度 生涯福祉研究センター研究プロジェクト一覧

- ①ペアレントトレーニング研究推進事業
- ②福祉用具および介護技術に関する研究推進事業
- ③子どもアドボカシーの養成と組織化のための理論及び実践モデルの研究
(アドボチャイルド)
- ④その他

II 地域支援事業部門

1. お父さん・お母さんの学習室 (ペアレントトレーニング相談事業)

①事業組織

| | |
|-------|-------------------|
| 事業代表者 | 小山憲一郎 (人間社会学部 講師) |
| 事業分担者 | 吉岡和子 (人間社会学部 教授) |
| | 池 志保 (人間社会学部 講師) |
| | 中藤広美 (人間社会学部 助教) |

②事業資金

福岡県立大学附属研究所費 (2019 年度)

項目: 附属研究所費 「ペアレントトレーニング研究推進事業」運営費 (620,000 円)

*ペアレントトレーニングを応用した特別支援教育スキルアップ・プログラム、
おもちゃとしょかん・たがわと共通経費

③主催団体・共催団体

主催: 福岡県立大学附属研究所 生涯福祉研究センター、

④事業の目的

この学習室の目的は、ご家庭で子どもにどのようにしたらうまく生活技能を教えることができるか、子どもの困った行動をどのようにしたら少なくすることができるか、などを保護者の方々に学んでいただくことにある。

ペアレントトレーニング (親訓練) とは、発達の遅れのある子どもを直接トレーニングするのではなく、毎日子育てを行っている親の方を 3 ヶ月間でトレーニングしようという考え方である。その方が直接子どもをトレーニングするよりも、その後の経過が良好だと言われている。われわれは 1999 年から、「お父さんとお母さんの学習室 (ペアレントトレーニング)」を実施してきている。

本事業の目的は、ペアレントトレーニングに参加する親に、子どもの行動と自分の行動を観察・記録するスキルを修得してもらうことで、子どもへの対応の改善と、子どもの行動の改善をめざすことである。

そこでは、子どもの行動についてできるようになってほしい行動とやめてほしい行動をあげてもらい、そこから子どもと親の行動をさまざまな側面から観察・記録してもらうことで、そこに支援の手がかりを見つけようとする試みを行ってきた。さらに、個別に面接を行うことでより介入的な支援も試みてきた。

その結果、多くの親がその改善に満足し、多くの手応えをつかんでペアレントトレーニングプログラムを終えていった。そこで親が身につけたものは、行動の観察・記録の仕方、困った行動への対処の仕方、子どもの行動のほめ方、子どもができないときの手がかりの与え方、子どものまわりの環境の整え方である。

ペアレントトレーニングプログラムを終えた親からのコメントには、「こんなことを言っても通じないだろうと思っていたが、やり方を変えるとこんなに通じやすいのかと驚いた」、「こんなにちょっとした工夫だけで子どもの行動が変わっていくのに驚いた」、「子どもに強化子を与えるのは動物の調教みたいでいやだったけど、実際に子どもが変わっていくのがわかり、無理なく子どもと接していけることに驚いた」、「子どもは、強化子のために行動しているというより、やはり親の自分との関わりを求めているのだなと思った」、「子どもと一緒にいることが前より楽しくなった」といったものがあげられた。それにともない親の抑うつ度やストレス度も下がっていった。

⑤事業の内容

対象：発達に遅れのある子どもを持つ保護者の方

子どもの年齢は、3歳から10歳頃まで

期間：春季クラス、3ヶ月フォロー、6ヶ月フォロー

秋季クラス、3ヶ月フォロー、6ヶ月フォロー

24回開催

⑥参加人数 のべ72名

2. おもちゃとしょかん・たがわ

①事業組織

事業代表者：中藤広美（人間社会学部 助教）

②事業資金

福岡県立大学附属研究所費（2019年度）

項目：附属研究所費 「ペアレントトレーニング研究推進事業」運営費（620,000円）

*お父さんとお母さんの学習室（ペアレントトレーニング）、ペアレントトレーニングを応用した特別支援教育スキルアップ・プログラム、共通経費
参加者実費負担 特になし

③主催団体・共催団体

主催：福岡県立大学附属研究所 生涯福祉研究センター

④事業の目的

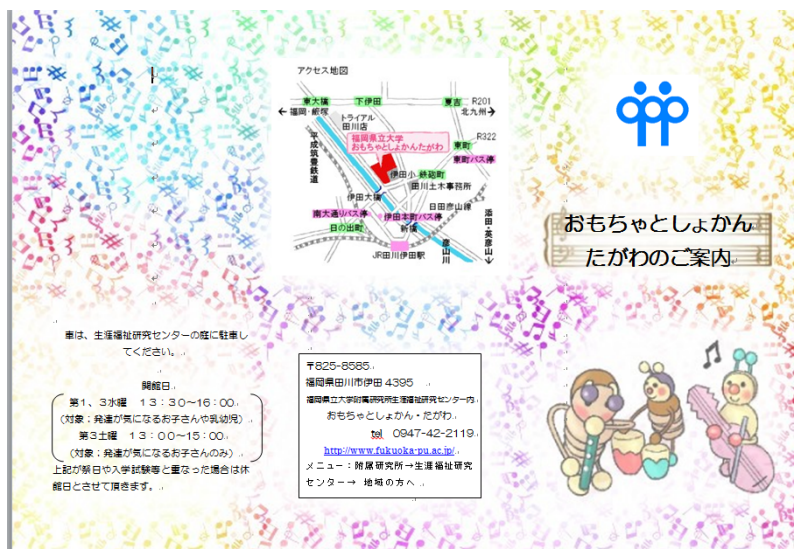
- 1)玩具を図書館形式で貸し出したり親子が交流の場として利用したりすることによって、発達の援助や子育て支援をおこなう。
- 2)利用対象を未就学児童親子全般とし、小さな子ども達が安心して遊べる空間を提供しながら、おもちゃの貸し出しや、遊び方のモデル提示をするなどして発達の援助を行う。
- 3)保護者から寄せられた相談に応じ、さらに必要な場合には、本学の親訓練プログラムの説明・案内及び関連諸機関を紹介し、発達障害児の療育支援を行う。
- 4)お父さんとお母さんの学習室（ペアレントトレーニング）修了者のフォローアップの場として位置づけ、その後の取組み内容などへの相談に応じたり、具体的な取組みのアドバイスを行ったりする。

⑤事業の内容

- 1.主な活動内容：おもちゃの貸し出し、遊び場の提供
- 2.おもちゃ貸出日：第1、3火曜日 13:30～16:00、第3土曜日 13:00～15:00
(第3土曜日は、発達が気になるお子さんとその家族のみ)
- 3.利用対象者：発達が気になるお子さんやその家族、および乳幼児とその家族
- 4.2019（平成31）年度開館日数：22日間
- 5.利用者 のべ176名（平成31年4月～令和01年3月）
*なお、2020年3月は、新型コロナウイルス感染症拡大のため閉館とした。
- 6.貸出の手続
 1. 申し込み票を提出し利用者カードを作成する
 2. 貸出期間は1ヵ月
 3. 貸出個数 絵本5冊 おもちゃ1点

7.貸出対象者

発達が気になるお子さんとその兄弟・家族、乳幼児、児童教育関係機関、地域の子育て団体など



おもちゃとしゃかん たがわパンフレット 表面



おもちゃとしゃかん たがわパンフレット 裏面

3. 福岡県立大学福祉用具研究会

①事業組織

事業代表者：神谷英二（人間社会学部 教授）

事業分担者：中藤広美（人間社会学部 助教）

大山美智江（非営利活動法人 NPO 福祉用具ネット事務局長）
坂田栄二（非営利活動法人 NPO 福祉用具ネットものづくりセンター長）

②事業資金

福岡県立大学 附属研究所費「福祉用具および介護技術に関する研究推進事業」運営費
518,000 円

③主催団体・共催団体

共同主催：福岡県立大学附属研究所 生涯福祉研究センター
特定非営利活動法人 NPO 福祉用具ネット

④事業の目的

「寝たきり」あるいは「寝かせきり」を予防し、可能な限り自力で生活できるように、生活支援の主たる介護サービスの一環として福祉用具の活用を推進することにある。それを推進するために、福岡県立大学福祉用具研究会が平成 10 年に発足し、以下のような目標の実現を目指している。

- ・福祉用具の活用が重要であることを広く啓発すること
- ・福祉用具に関する情報を提供し、利用者が福祉用具の知見を蓄積すること
- ・介護保険制度のなかで、福祉用具の活用と住宅改修を活用すること
- ・福祉用具の開発を支援するために、本研究会において用具の評価に積極的に取り組むこと

⑤事業の内容

1. 研究会の開催 2019 年度テーマ：「専門職による福祉用具の新製品や開発品の相談&福祉用具勉強会」

本研究会の強みは現場の最前線にいる人たちが実体験を踏まえていること、そして、他職種との意見交換を行うことで互いの考え方を理解でき、互いに高め合うことができていることである。この強みを生かし、2019 年度は、前年に引き続き「ふくおか医療福祉関連機器開発・実証ネットワーク」と連携しつつ、専門職による福祉用具の新製品や開発品の相談&福祉用具に関する研究会を 9 回開催し延べ 142 名の参加があった。

2. NPO 福祉用具ネットへの協力

本学福祉用具研究会と密接な連携を結んでいる NPO 福祉用具ネットの諸活動について支援を行った。

3. P.P.C.2019

第 21 回西日本福祉機器展出展

2019 年 11 月 14 日（木）～11 月 16 日（土）

主 催：西日本国際福祉機器展実行委員会（九州経済産業局、福岡県、北九州市、(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構九州支部、(独)日本貿易振興機構北九州貿易情報センター、北九州商工会議所、(社福)福岡県社会福祉協議会、(社福)北九州市社会福祉協議会、(財)北九州産業学術推進機構、(財)西日本産業貿易コンベンション協会) / (財)西日本産業貿易コンベンション協会

内 容：ポスターセッション、ブース出展
福祉用具研究会の活動を報告した。

来場者数：18,611名

4. 子どもアドボカシーの養成と組織化のための理論及び実践モデルの研究 (アドボチャイルド)

4-1. 「アドボチャイルド活動と『教育』

— 倉石／仁平の『教育化』に関する議論を手がかりに

生涯福祉研究センター 助教 二見妙子

はじめに

生涯福祉研究センター「アドボチャイルド」では、その活動の一環としてこの四年間、田川郡香春町の子ども食堂「キッチン小春ちゃん」実践に参加させていただいた。活動概要については、昨年度現地実行委員会から報告いただいた。また、後頁に、学生による子ども食堂調査報告と子どもの権利をテーマに作成したポスターを掲載する。ここでは、アドボチャイルドの担当者として「キッチン小春ちゃん」実践における「教育」について考察を行う。その視点は、倉石一郎（2019）及び、仁平典宏（2015）が示す「社会問題の教育化」「社会保障の教育化批判」による。

1、倉石の「社会問題の教育化」議論と本活動の意義

倉石（2019）は「教育化」概念の二つの側面を示し、狭義のそれは「子どもを基準に生活の再デザイン過程、あるいは進歩的考えにもとづく施設収容化、構造化、孤立化」であり、広義には「社会問題に対処する中心点としての教育を想起する全体的な志向性や傾向」とする。倉石は「教育が社会問題の教育化から完全に逃れることは不可能」と主張すると同時に日本における「キャリア教育」「学習支援活動」「シティズンシップ教育」など社会問題の教育化については「マイナーで周縁的」と指摘する。一方「いじめ防止対策法」「道徳の教科化」「不登校問題」「大学入試改革」などをとらえ、「メディアの注目を集め、教育消費者に圧力を持たせ、学校の内側だけを志向する学校改革」と批判する。そして日本に於いて社会問題の教育化が停滞しそれに付随する学校改革が不遇なままである要因について倉石は「教育消費者の圧倒的パワー」「専門職主義の未発達」と述べるが、それでもなお「社会問題の教育化は、学校が外の世界とのつながりを保っている健全度を示す現象であり、教師や生徒が教育消費者の恣意からのがれられ、民主主義の学習を作り出す」可能性を示唆する。

香春町「キッチン小春ちゃん」実践において、私たちは子どもアドボカシーを中心に据え、パターンリズム、アダルトリズムを排除することに最も注意を払った。家庭的に厳しい状況の中で生きている子どもたちや地域から排除されやすい障害児など、いちばんきつい子どもたちが参加できるインクルーシブな場所を作りたいと考えた。学習会などを通じて子どもたちの声を聞くことの意味について、専門職、ボランティア市民共通の認識となるように意図

した。また、本活動における学生の参加は、子どもアドボカシーの立場から重要な役割と機能を担った。「キッチン小春ちゃん」では、おいしい食事がたくさんの高齢の方々のご努力によって提供され、子どもたちはにぎやかに食事したり遊んだり勉強したりする。また、保護者の方々には、その姿をゆったりと見守れる場所を用意する。学生たちは、そのための空間作りに主体的に取り組み、用意されている種々の教材やおもちゃを使って、子どもたちが楽しめるようにそれぞれの知性と感性を存分に発揮していた。1ヶ月1回から2ヶ月1回実施されるこの「キッチン小春ちゃん」に、本学からは毎回5名から7名程度の学生が参加した。交通費のみ支給される完全ボランティアであったが繰り返し参加する学生も複数いた。彼らの参加動機はさまざまである。「子どもたちに、又来てねといわれることがうれしい」「塾などのアルバイトと違って、子どもたちと自由に関わることができる」「障害児とか、不登校児とか、貧困家庭の子どもというラベリングがない。来たい人たちは誰でも来ることができるような雰囲気を作られている」「食事がおいしい」「地域の人たちが優しい」など、大人と子どもたちの間で子どもたちの声を聴く存在として自分自身も楽しみながら、学生たちは子どもたちに心を寄せる活動に参加していたのである。この学生の参加が、本実践を活気づける重要な要素であったことはいうまでもない。これらはまさに、倉石が示す「社会問題の教育化」であり「学校が外の世界とつながっている健全度を示す現象」の一つである。

2、仁平による「社会保障の教育化批判」論と学習支援の両義性

仁平（2015）は『教育化』する社会保障と社会的排除—ワークフェア、人的資本、統治性」には、福祉国家の再編に伴い教育や訓練を通じて求められるワークフェアには「社会的排除を改善するベクトルと悪化させるベクトルがある」と指摘する。具体的には、ニューレイバーの社会的包摂政策が一定の成果をあげたと評価される一方で、むしろそれこそが貧困家庭の若者に対する抑圧や排除を深化させたと批判される背景について「社会構造の転換ではなく個人の努力によって社会的排除に対応するよう仕向ける統治性としての性格を持っていた」と指摘する。仁平は「社会的排除を回避する掛け金は、ワークフェアへの参加／離脱の前提として無条件で普遍主義的な社会権保障を論理的かつ制度的に先行させることにある」と主張するのである。

「キッチン小春ちゃん」実行委員会では、これまで何度か「無料塾のような学習をさせるかどうか」議論した。しかし今のところ私たちは、統一的な学習時間は設定せず「その子がしたいなら」という立場を採用している。勉強したい子どもたちがテキストやノートを広げられるスペースをつくり、そこに学生が寄り添っている。「勉強しなさい」ということはしない。なぜなら、学習活動を前面に押し出してしまえば、それに積極的に向き合える子どもたちとそうではない子どもたちがここでも分断され、さらなる排除が生じることを怖れるからである。現在、学校外の学習支援活動がさまざまな場所で行われているが、そこで支援する立場の人たちは、学習支援の両義性について学ぶ機会があるのだろうか。もし、支援をする人たちが「学力保障」＝「収入保障」という考え方によって、社会構造の課題や社会保

障の課題を子どもやその家族個人の責任へと転嫁してしまうならば、より厳しい環境下の子どもたちの排除を促進してしまう危険性がある。それぞれの学習支援の場では、このことについて認識し、①障壁にみちた社会を変えること②社会権は教育を介することなく固有の重みに於いて擁護されるもの（山口・堤：2014）、という視点が普及される必要がある。

おわりに

以上、倉石の「社会問題の教育化」議論からアドボチャイルド活動の意義を捉え、仁平による「社会保障の教育化批判」論から学習支援の両義性を考察した。社会問題の教育化という視点からは、本活動の有効性を捉えることができた。一方で「社会保障の教育化批判」という視点にて本活動における学習支援を捉えるならば、今後も「勉強したい人はやる」「強制はしない」という態度を継続することが重要であると考えた。そして、本活動や他の学習支援活動に携わる人たちが「子どもやその親が頑張ればなんとかなる」という目線で子どもやその保護者に向き合うことを回避するための戦略の必要性が明らかとなった。今後、活動に参加する人たちと共に子どもに押し寄せている「社会」の問題について学び、その問題を「社会」に返していく方法を考えたい。それはまた、倉石のいう「社会問題の教育化」に付随する学校改革を後押しする可能性につながると考える。

文献

- ・ 倉石一郎（2019）「遍在だが周辺的—日本における「教育化」現象をめぐる一考察—私がD.ラバリー著『教育依存社会アメリカ』から最も深く学んだこと—」。
- ・ 仁平典宏（2015）「『教育化』する社会保障と社会的排除—ワークフェア、人的資本、統治性」『教育社会学研究 96』、175-196。
- ・ 山口毅・堤孝晃、2014、「教育と生存権の境界問題」広田照幸・宮寺晃夫編『教育システムと社会——その理論的検討』世織書房、pp.208-226。

4-2. 学生による調査活動の報告

①田川市・香春町のこども食堂の比較検討

福岡県立大学 4年 足立智香

- ・こども食堂とは 子どもに無料、もしくは低額で食事を提供する民間発の取り組み
- ・活動は2012年に始まり、全国に少なくとも3718か所（2019年5月時点）

調査概要

田川市：2019年10月16日「花野の香こども食堂」関係者のA氏に対し半構造化面接によるインタビュー調査を行った。

香春町：2019年11月1日 香春町社会福祉協議会（以下社協）の職員であり、「キッチン小春ちゃん」の運営のサポート役をしているB氏に対し半構造化面接によるインタビュー調査を行った。

対象者の名前はすべて仮名とし、個人が特定できるような情報は提示しないなど、倫理的配慮を行っている。

田川市：花野の香こども食堂（1）

ふだんは居酒屋として経営されているが、毎週土曜日のお昼時には共生食堂型のこども食堂となっている。

花野の香こども食堂の概要

| | |
|----------|--------------------------------|
| 場所 | 田川市 |
| 主催 | 居酒屋「花野の香」店長 |
| 開催頻度 | 毎週土曜日10:00～14:00 |
| 主な利用者 | 小中学生 |
| ボランティア | 大学生、民生委員 |
| こども食堂の形態 | 共生食堂 |
| 料金 | 子ども（中学生まで）無料 高校生300円 大人500円 |

出典：インタビューをもとに筆者が作成

田川市：花野の香こども食堂（2）

こども食堂への思い

- ・こども食堂は「みんなで楽しく食べる場」「居場所・拠り所」になってほしい

→居場所、拠り所となるためには継続していかなければならない。

・子どもたちには家庭の事情は聞き出さないように心がけている。

→事情を聞き出そうとしてしまうと、深く知られたくない子にとっては来づらくなってしまふ

田川市：花野の香こども食堂（3）

子どもたちの様子

・食堂に複数の校区の子どもが集まっており、またボランティアやスタッフもいる

→親や教師以外の大人と関われる場である

・参加する子どもの多くは決まったメンバーで、何度もこども食堂へ訪れている

→毎週開催していることで子どもたちにとって居場所となっており、スタッフやボランティアとも濃い関係が築かれている

田川市：花野の香こども食堂（4）

こども食堂の課題〔1〕

・子どもたちのケンカの際の対応

→スタッフはボランティアを含めても女性が非常に多いため、子どもたちの扱いに慣れた男性のスタッフがいると心強い

・教師とのつながりが少ない

→教師に、学校生活で気になる子にこども食堂の存在を教えてもらい、そこから支援の欲しい子に届いてほしい

田川市：花野の香こども食堂（5）

こども食堂の課題〔2〕

・子どもの事情にどこまで踏み込んでいいのか。

→教育・家庭の習慣と虐待との判断を、専門知識のない一般人が判断するのは非常に難しい

・精神的なフォローや寄り添いがどこまでできるのか。

→もっと子どもとスタッフの交流を増やしたい一方で専門的な知識や技術のないスタッフがどのように子どもたちのケアができるのか、という点が問題である。

香春町：キッチン小春ちゃん（1）

キッチン小春ちゃんは共生食堂に分類される

実行委員会は町民の有志から構成され、社協の職員はこども食堂の活動のサポート役としてアドバイスしている

キッチン小春ちゃんの概要

| | |
|----------|----------------|
| 場所 | 田川郡香春町 |
| 主催 | キッチン小春ちゃん実行委員会 |
| 開催頻度 | 2か月に1回、昼の会か夜の会 |
| 主な利用者 | 未就学児～小学生、保護者 |
| ボランティア | 中学生、大学生、地域住民 |
| こども食堂の形態 | 共生食堂 |
| 料金 | 大人300円（任意） |

出典：インタビューをもとに筆者が作成

香春町：キッチン小春ちゃん（2）

こども食堂への思い

- ・子どもたちにとって「自分らしく過ごせる場」にしていきたい。
- 生活環境を問わずに、様々な子どもたちが参加できるような場に近づいてきていると実感している。
- ・保護者にとって子育てから少しだけ開放され一息つけるような場に。
- コーヒースペースつくったことで保護者同士の交流ができた
- ・地域にとって、地域で支えあう機能や家族同士の相互扶助の機能の一部を担っていくことを目指している。
- 悪いことをしたらしっかり怒り、また何気ない話を聞いてくれる存在がたくさんいることが情緒的なサポートにつながる。

香春町：キッチン小春ちゃん（3）

地域とのかかわり

- ・自分の役割がなくなつたと感じている人が多く、そういった人がこども食堂で楽しく過ごせている。
- ボランティアを通じて知り合った人たちもおおり、そこで新たな関係性を構築することに貢献している。

香春町：キッチン小春ちゃん（4）

こども食堂の課題〔1〕

- ・こども食堂でネットワークをつくること。
- 筑豊地区にはこども食堂の数が少ないため、講演会を開くなど情報発信をして、お互いがどんな活動をしているのかを知っていくことが重要。

- ・貧困家庭に対しての住民の理解を深めること。
- こども食堂の活動に携わっている人の中には、困窮家庭の取り巻く環境が想像できない人に困窮家庭の状況を考えてもらう場を設けることが必要。

香春町：キッチン小春ちゃん（5）

こども食堂の課題〔2〕

- ・より住民が運営に携わっていくことができるように体制を整えること。
- 運営にかかわっている住民のボランティアが少なく、メンバーが固定化されているとイベントのアイデアもマンネリ化してしまうため、多くの人がかかわって様々な意見や発想が出てくるようにしたい。

考察：2事例の比較検討（1）

地域交流拠点機能

- ・田川市：同年代や異なる年代との交流の場として機能している。
- 個人で開催しているため支援の輪は広まりにくい状況にある。
- ・香春町：参加者は未就学児～高齢者と、多世代が交流できる場として機能している。
- このような場は、地縁が薄くなってゆく現代社会において貴重な場であると言える。

考察：2事例の比較検討（2）

居場所機能

- ・田川市：毎週開催していることで、子どもたちにとって居場所となっている。
- スタッフや学生ボランティアもよく訪れる子どもの顔と名前を覚えており、濃い関係が築かれている。
- ・香春町：子どものみならず、ボランティアとして参加している地域住民にとっても居場所となっている。
- 香春町は2ヶ月に1回の頻度であるため、子どもたちにとっては居場所とはなりづらい。

考察：2事例の比較検討（3）

貧困対策機能

- ・田川市：子どもの変化に気づきやすく、また親にとっても食事の負担が軽減されていると考えられる。
- 専門的な判断を下すことはできない状況である。
- ・香春町：社協が協力しているため、気になる子がいればすぐ必要な処置へつなぐ体制ができています。
- なかなか関係を築けないため子どもからSOSを出しにくい。

まとめ：こども食堂の機能

こども食堂は地域交流拠点、居場所、貧困対策としての機能を有しているが、食堂によって機能の厚みが異なる。

- ・ 田川市：居場所機能＞地域交流拠点機能
- ・ 香春町：地域交流拠点機能＞居場所機能
- ・ 貧困対策機能：田川市＝香春町

今後の展望

- ・ 田川市：地域住民や専門職との関わりが薄いため主催者側の負担が大きく、また子どもへの対応は手探りな状況。

→ 今後は専門職と連携してこども食堂と地域とのつながりを構築し、地域全体が子どもの取り巻く環境について関心を持つことが重要。

- ・ 香春町：交流が活発で、かつ常に専門的なアドバイスが受けられる状況であるが、利用者にとっては「イベント」である。

→ 開催頻度を高めることで「居場所」となっていくのではないだろうか

②子ども食堂の役割 —3つの子ども食堂の見学を通して

福岡県立大学2年 平野夏奈 吉田菜七

子ども食堂の役割

3つの子ども食堂の見学を通して

福岡県立大学 人間社会学部 社会福祉学科
平野夏奈 吉田菜七

目次

1. いくつかの子ども食堂
2. 子ども食堂の特徴・見学を通して気づいたこと
3. 若者の参加の効果
4. まとめ・今後の展望

太宰府いきいき子ども食堂

- 場所：太宰府いきいき情報センター二階
- 開催日：毎月第二日曜日
- 時間：食事11時半～14時
お楽しみ11時～14時
- 参加費：大学生以上200円



太宰府いきいき子ども食堂

- メニュー：炊き込みご飯・味噌汁・副菜・水ようかん
- 参加者：子ども35人、大人49人（合計84人）
- 活動内容：お楽しみ、食事
- 食材の調達方法：フードバンク、地域の方からの提供



太宰府いきいき子ども食堂の様子

- 絵本の読み聞かせ
- 工作
- 食事



福岡県立福岡農業高校の子ども食堂

- 場所：太宰府市の福岡県立福岡農業高校（食品化学科棟）
- 開催日：不定期
- 時間：9時30分受付開始、12時から食事開始
- 参加費：100円



福岡県立福岡農業高校の子ども食堂

- メニュー：ドライカレー・アイス・豆腐ドーナツ
リンゴの天然酵母ジュースの炭酸割
- 参加者：天拝小学校の1年生～6年生32名
保護者数名
- 活動内容：調理体験、食事



福岡県立福岡農業高校の子ども食堂の様子

- 高校生が準備・指導
- 低学年の児童はアイス作り
- 中学年の児童はドーナツ作り
- 高学年の児童はドライカレー作り
- 班を作って食事



(福岡農業高校HPより<http://fukuoka-agr.fku.ed.jp/Default2.aspx>)

香春町のキッチン小春ちゃん

- 場所：香春町の地域福祉センター「香泉荘」
- 開催日：不定期
- 時間：17時30分～19時30分
- 参加費：中学生まで無料、高校生100円、大人300円



(ふれあいかわら版111号
file:///C:/Users/User/AppData/Local/Microsoft/Windows/NetCache/IE/ZU35SGYU/area/111.pdf)

香春町のキッチン小春ちゃん

- メニュー：シチュー・パン
- 参加者：子ども47人、保護者11人、スタッフ36人
(合計94人)
- 活動内容：各自思い思いの遊びや宿題など、食事
- 食材の調達方法：地域の方からの提供



香春町のキッチン小春ちゃんの様子

- 様々な遊び
 - ・鬼ごっこ
 - ・ボードゲーム
 - ・折り紙
 - ・風船 など
- 宿題
- 食事



(西日本新聞2019/12/13
<https://www.nishinippon.co.jp/image/152097/>)

2、子ども食堂の特徴・見学を通して気づいたこと 太宰府いきいき子ども食堂

- 親子でのコミュニケーション
- 親子関係の構築
- 住民の参加

教育的な側面

2、子ども食堂の特徴・見学を通して気づいたこと

福岡県立福岡農業高校

- 高校生による運営
- 調理体験
- 地域のネットワーク

(・パンを保育園に提供 ・小学生の収穫体験・約10年間の活動で構築されたネットワーク)

食育的な側面

2、子ども食堂の特徴・見学を通して気づいたこと

キッチン小春ちゃん

- 子ども同士のコミュニケーション
- 中学生のボランティアが参加
- 斜めの関係

解放型

斜めの関係
(文部科学省HPより)

世代間交流

(香春町ホームページ「香春町教育復興基本計画」より)

(略)しかし、都市化や少子化、核家族化等の進行は、地域の絆が強い香春町においても地域コミュニティ(用語解説 42Pを参照)の希薄化を招き、以前に比べると縦横のつながり、すなわち、子どもが大人とコミュニケーションをとる機会、また、人と人との交流の機会が少なくなっています。そして、子育て・教育を支える環境の弱体化や多くの知恵・文化の継承が困難になりつつあります。地域を支え、発展させるのは、地域の人々の総合的な力であり、その礎となる地域コミュニティは、家庭教育を支え、そして、地域の教育力において重要な役割を担い、まちづくりの中心となる存在です。今後も、地域の教育力を高めるためのさらなる取組が必要です。

考察

今回の香春町の子ども食堂への参加を通して、キッチン小春ちゃんでは世代間交流が盛んに行われており、香春町教育復興基本計画で述べられている子どもが大人とコミュニケーションをとる機会、人と人との交流の機会が少なくなっているという課題に対応する取り組みになるのではないかと考えた。

3、若者の参加の効果

- 子ども食堂は中高生にとっても活躍できる可能性がある場所
- 年齢の低い子ども達にとって先生や親や友達とは違うが身近な存在になることができる
- 中高生自身にとっても小さい子どもと触れ合える良い経験になる
- 子ども食堂の活動の活性化



4、まとめ・今後の展望

- 地域性や課題に応じた運営がなされている
- 地域でのネットワーク構築が欠かせない
- 中高生や地域の人に関心を高めてもらうことが大切
- 自由に参加できる、保護者の負担は少ない、気軽に参加出来るというメリットがある。



子ども食堂が従来の子ども会に代わる新しいコミュニティになっていくのではないかと

参考資料

- ▶ 太宰府いきいき情報センターホームページ
<http://www.dazaifu-info.or.jp/>
- ▶ 太宰府いきいき子ども食堂ホームページ
<http://dazaifu-kodomo.com/>
- ▶ 福岡県立福岡農業高校ホームページ
<http://fukuoka-agr.fku.ed.jp/Default2.aspx>
- ▶ ふれあいかわら版111号
file:///C:/Users/User/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/ZU3SEGYO/fureai111.pdf
- ▶ 香春町ホームページ 「香春町教育振興基本計画」
<https://www.town.kawara.fukuoka.jp/s033/020/010/040/2017331184210.pdf>
- ▶ 西日本新聞2019/12/13
<https://www.nishinippon.co.jp/image/152097/>
- ▶ 文部科学省ホームページ
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/toushin/07030123/002.htm
- ▶ いらすとや
<https://www.irasutoya.com/>

ご清聴
ありがとうございました



子ども食堂の役割 3つの子ども食堂の見学を通して

福岡県立大学 人間社会学部 社会福祉学科
平野夏奈 ・ 吉田菜七

3つの子ども食堂の見学を通して子ども食堂の役割について発表します。

目次は次の通りです。

- 1、いくつかの子ども食堂
- 2、子ども食堂の特徴・見学を通して気づいたこと
- 3、若者の参加の効果
- 4、まとめ・今後の展望

1、いくつかの子ども食堂

9月8日に太宰府市にある、太宰府いきいき子ども食堂を訪れました。場所は太宰府いきいき情報センター二階です。開催日は毎月第二日曜日で、時間は食事が11時半から14時まで、お楽しみが11時から14時までとなっており、参加費は大学生以上200円となっています。

この日のメニューは炊き込みご飯・味噌汁・副菜・水ようかんでした。

参加者は子ども35人、大人49人、合計84人でした。

活動内容は読み聞かせや工作などのお楽しみと食事です。

食材の調達方法は、フードバンク、地域の方からの提供があるようです。

太宰府市の子ども食堂では、絵本の読み聞かせや工作などを親子で行っており、絵本の読み聞かせでは、ボランティアの方による読み聞かせを行い親子で同じ物語を聞き、工作では、ボランティアが作り方を説明し親子で作る等といった活動を行っていました。加えて地域の方が作った竹トンボを配り親子やほかの子どもと一緒に昔の遊びの体験を行うこともありました。

また、食事では、席につき次第ボランティアが食事を運び順番に親子で食事を楽しんでいました。

10月19日に太宰府市にある福岡県立福岡農業高校を訪れました。

場所は太宰府市にある福岡県立福岡農業高校の食品化学科棟です。

開催日はこの日が初めての開催だったため、まだ不定期です。

時間は9時30分受付開始、12時から食事開始です。

参加費：100円です。

この日のメニューはドライカレー・アイス・豆腐ドーナツ・リンゴの天然酵母ジュースの炭酸割でした。

参加者は天拝小学校の1年生～6年生32名、保護者数名です。

活動内容は調理体験と食事となっています。

福岡農業高校では生徒主体でNPO法人を立ち上げ、その活動の一環としてこの日が初めて子ども食堂を開催していました。農業高校の生徒が事前に考えたレシピや用意した食材をもとに作り方を指導し、子ども達といっしょに作っていました。低学年と中学年は包丁を使わないですむアイスやドーナツづくり、高学年は調理過程の多いカレー作りをするなど、子どもの年齢などに合わせて体験する内容も変えていました。食事が出来上がると、子ども達は机で班を作って待機し農業高校の生徒が食事をよそって配膳していました。その間保護者は子ども達の調理や食事を楽しんでいる様子を見学していました。

5月30日に香春町のキッチン小春ちゃんを訪れました。

場所は香春町の地域福祉センター「香泉荘」で、開催日は不定期です。

時間は17時30分から19時30分となっています。

参加費は中学生まで無料、高校生100円、大人300円です。

この日のメニューはシチューとパンでした。

参加者は子ども47人、保護者11人、スタッフ36人、合計94人でした。

活動内容は各自思い思いの遊びや宿題などと食事です。

食材の調達方法は地域の方からの提供です。

子ども達は食事の時間になるまで風船、粘土、ボードゲーム、宿題、鬼ごっこ、等を行い、思い思いの時間を過ごしていました。遊びの時間では、子ども同士で遊ぶ子や、ボランティアを誘って一緒に遊んでいる子もいました。中学生はボランティアとして参加し、児童の遊び相手になっていました。保護者は、子どもを子ども食堂に預けた後帰宅する人もいれば、ボランティアに子どもを任せ部屋の一角でテーブルを囲んで会話を楽しんでいるようでした。食事の時間になると、食べたい人から食事場所へ行き、好きなパンを選び、シチューをよそってもらって親子や友達と食事を楽しんでいます。食事が終わると、すぐに遊ぶ場所に戻って帰りの時間が来るまで再び好きなことをして遊んでいます。

2、子ども食堂の特徴・見学を通して気づいたこと

次に3つの子ども食堂の特徴や見学を通して気づいたことについて話します。

太宰府いきいき子ども食堂では、開催日によって活動は異なりますが、お楽しみ会の内容として、希望する参加者全員で工作をしたり、お口の健康教室を行うなど教育的な側面が強くみられました。活動は親子で一緒に行うことが多く、親子でのコミュニケーションを図る機会が増え、親子関係の構築に役立っているのではないかと考えました。この子ども食堂は、様々な地域住民の方が利用する大宰府いきいき情報センターの一角で行っているため、センターの入り口から子ども食堂のブースに行くまでに、多数の利用者を見ることができました。センター内で地域住民の方に対して子ども食堂の利用を呼び掛けているため親子以

外にも、地域の高齢の方等の参加も数名見られました。

福岡県立福岡農業高校では、農業高校という特色を生かして、子ども達は、食事が出来上がるのを待つのではなく、高校生の指導の下自分たちも調理に参加しており、食育的な側面が見られました。そして、教える高校生たちも、模造紙にわかりやすくレシピを書く等、どのように説明すればわかりやすく伝わるのか工夫している様子も見られ、子ども達だけでなく、この活動を通して、高校生達の成長にもつながっているのではないかと思います。また、農業高校では、10年ほど前から生徒主体でNPO法人を立ち上げ、普段から高校生が作ったパンを保育園の給食に出したり、小学校と協力し農業高校で小学生が収穫体験をするなど、地域内の学校や機関との交流が盛んであり強力な地域のネットワークを持っている印象がありました。長年の活動で構築されたネットワークが子ども食堂の運営を後押ししているのではないかと考えました。

キッチン小春ちゃんでは、親子それぞれが安心して過ごせる解放型の支援が行われているようでした。香春町は育児不安を抱えている家庭へのサポートとして子ども食堂の運営がスタートしており、子育て支援の側面があるように感じました。参加者の年齢は幅広く、子ども達同士のコミュニケーションが盛んにみられました。ボランティアや大人が手を差し伸べるのではなく、年上の子が年下の子どものお世話をするなど、子ども達同士で自然と気遣い合う様子が見られ、学校での同級生との横のつながり、先生や保護者等大人との上下関係などとは違った、斜めの関係（文部科学省HP：https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/toushin/07030123/002.htm）が構築されているように見えました。幅広い年齢の子ども達が同じ空間にいることで大人が介入しなくても自然と世代間交流が行われているように感じました。

「香春町教育復興基本計画」では都市化や少子化、核家族化等の進行は、地域の絆が強い香春町においても地域コミュニティの希薄化を招き、以前に比べると縦横のつながり、すなわち、子どもが大人とコミュニケーションをとる機会、また、人と人との交流の機会が少なくなっていることが懸念されており、家庭教育を支え、そして、地域の教育力において重要な役割を担い、まちづくりの中心となる存在である地域コミュニティの発展のために今後も、地域の教育力を高めるためのさらなる取組が必要と述べられています。

今回の香春町の子ども食堂への参加を通して、キッチン小春ちゃんでは世代間交流が盛んに行われている様子が見られ、香春町教育復興基本計画で述べられている子どもが大人とコミュニケーションをとる機会、人と人との交流の機会が少なくなっているという課題に対応する取り組みになるのではないかと私たちは考えました。

3、若者参加の効果

この3つの子ども食堂の見学を通して、子ども食堂の活動の活性化のためにも若い世代の参加は重要なカギとなるのではないかと考えました。香春町では、中学生のボランティアが活動するようになり、福岡農業高校では高校生が主体となっており、子ども食堂は中高生にとっても活躍できる可能性のある場所となっています。中高生が参加することは、年齢の低い子ども達にとって先生や親や友達とは違うが身近な存在になることができ、中高生自身にとっても小さい子どもと触れ合える良い経験になっているのではないかと考えます。

4、まとめ・今後の展望

今回、3つの子ども食堂の見学を通して、子ども食堂と言っても全く同じ活動が行われているわけではなくそれぞれが持っている強みを生かして地域性や課題に応じた運営がなされていることに気が付きました。また、ボランティア・活動資金・食材の安定した確保のためには地域でのネットワーク構築が欠かせないと感じ、それらの確保の為に、幅広い世代に子ども食堂の存在を周知して、中高生や地域の方に関心を高めてもらうことが大切だと考えました。

また、太宰府市の子ども食堂を見学したときに、「子ども会は保護者の負担が多く、参加しづらい」という声を聞きました。その点、子ども食堂は自由に参加できることや、保護者の負担は少ないということ、気軽に参加することが出来るというメリットがあるため、私たちは子ども食堂が従来の子ども会に代わる新しいコミュニティになっていくのではないかと考えました。

子ども食堂は地域における新しいコミュニティの構築に役立っており今後もさらなる発展が期待されます。

参考資料はこちらです。

- ・ 太宰府いきいき情報センターホームページ
<http://www.dazaifu-info.or.jp/>
- ・ 太宰府いきいき子ども食堂ホームページ
<http://dazaifu-kodomo.com/>
- ・ 福岡県立福岡農業高校ホームページ
<http://fukuoka-agr.fku.ed.jp/Default2.aspx>
- ・ ふれあいかわら版 111号
<file:///C:/Users/User/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/ZU3SEGY0/fureai111.pdf>
- ・ 香春町ホームページ 「香春町教育振興基本計画」
<https://www.town.kawara.fukuoka.jp/s033/020/010/040/2017331184210.pdf>
- ・ 西日本新聞 2019/12/13
<https://www.nishinippon.co.jp/image/152097/>
- ・ 文部科学省ホームページ
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/toushin/07030123/002.htm
- ・ いらすとや
<https://www.irasutoya.com/>

ご清聴ありがとうございました。

③子ども食堂から見える、新しい形の支援について。

～香春町子ども食堂「キッチン小春ちゃん」から～

福岡県立大学人間社会学部公共社会学科 林ちなつ

1. 子ども食堂とは

1.1 概要

2012年に発足した子ども食堂は年々増え続け、NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ」の湯浅誠の調査では2019年には少なくとも全国に3718箇所存在する。2018年4月調査の2286人から1年で少なくとも1432か所が増加しているという結果となった（湯浅2019）。

定義として、全国で初めて「子ども食堂」を名乗った「八百屋だんだんこども食堂」の店主、近藤博子さんは「子どもが1人でも安心して来られる無料または低額の食堂」（湯浅2017：p70）と述べている。また、「「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー実行委員会テキストプロジェクト」では、『「(困難を抱える家庭の)子どものための食堂」ではなく、例えば高齢者の食事会に子どもが参加している場合なども「子ども食堂」と広くとらえています』（「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー実行委員会テキストプロジェクト2017：p7）と記載がある。そのほかに、『地域のボランティアが子どもたちに対し、無料又は安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供する取組を行う、いわゆる子ども食堂（子どもに限らず、その他の地域住民を含めて対象とする取組を含みます。）』と、厚生労働省では記載されている（厚生労働省2019：p9）。

定義が広いゆえに様々な形で存在する「子ども食堂」は近年急激に増加しており、新しい子どもに対する支援の形として存在を確立しつつある。

その子ども食堂という新しい存在から、新しい支援の形を捉えるために福岡県田川郡香春町にある子ども食堂「キッチン小春ちゃん」の調査を行った。

1.2 子ども食堂に対する公的支援

「子ども食堂」は「子どもの居場所」づくりに対する財政支援の一部として、様々な支援が行われている。

補助の内容について、内閣府は、

- 1) 居場所の立ち上げを補助するもの
- 2) 食材費・印刷費など運営費を補助するもの
- 3) 「学習支援」に特化して補助するもの
- 4) 「子ども食堂」に特化して補助するもの
- 5) 公民館や学校など既存の施設を活用した居場所づくりを補助するもの
- 6) 地方公共団体が、民間企業に居場所作りの運営を委託し、実施するもの

とあり、また一般的に「子ども食堂」を立ち上げる時に全国で使用可能な施策の例として

紹介されているものが、

①地域子どもの未来応援交付金、内閣府

…子ども食堂を含め、地域の資源を活かした子どもの貧困対策を支援

②子どもの生活・学習支援事業、厚生労働省

…基本的な生活習慣の習得支援、学習支援と併せて食事の提供等を行うことが可能な居場所づくりを支援

である（内閣府 2019：p2）。

そのほかにも、地方公共団体独自の支援が存在しており、福岡県では北九州市・福岡市・久留米市・大牟田市・八女市・飯塚市・田川市・小郡市・宗像市・志免市・筑前町の11市町村が子どもの居場所支援に対する独自事業を行っている（内閣府 2019：pp1-4）

また、社会福祉協議会のボランティア行事保険やキッチン小春ちゃんも対象となった「地域ボランティア活動支援の助成事業」の活用も行うことができる。

2. 香春町と子ども食堂「キッチン小春ちゃん」について

2.1 香春町と子ども

「キッチン小春ちゃん」は、福岡県田川郡香春町にある子ども食堂である。

香春町の資料「第2期 香春町子ども・子育て支援事業計画【素案】」によると香春町には2019年4月1日現在で10,975人の住民がおり、そのうち18歳未満が存在する一般世帯数は776世帯。公立の保育所（園）2つ、私立の保育所（園）3、公立の幼稚園1施設が存在し、270人が利用している、また小学校3校516人、中学校2校236人の合計752人が小中学校を利用しているとある。よって香春町に存在する幼稚園・保育園及び義務教育施設に所属する未成年者は1022人である。（香春町 2020：pp2-13）。

このうち、「キッチン小春ちゃん」の利用者は、2016年から2018年の調査によると一回の参加児童数は最大で2018年3月26日11:30~13:00の延べ44名、最小で、2016年12月15日15:30~19:00の延べ6人（二見・建部 2018：pp13-15）である。よって全体の延べ人数は3年間で1,077人（内2016年度184人、2017年度381人、2018年度512人）。

2.2 「キッチン小春ちゃん」の運営

「キッチン小春ちゃん」は基本的に寄付及びカンパによって成り立っており、「キッチン小春ちゃん運営委員会」による運営が行われている。

また、平成30年度「地域ボランティア活動支援のための助成事業」において、社会福祉法人福岡県社会福祉協議会ボランティア助成プログラム「地域ボランティア活動支援の助成事業」による助成金30万円を得ている。（社会福祉法人福岡県社会福祉協議会 2019）

下表①は「キッチン小春ちゃん」の運営形態を示した。

| | |
|----------|---|
| 分類 | |
| 地域 | 香春町 |
| 場所 | 香春町地域福祉センター「香泉荘」及び「フレッシュワーク香春 |
| 目的 | 居場所づくり・地域交流 |
| 運営 | 地域住民「キッチン小春ちゃん運営委員会」 |
| 開催日・頻度 | 不定期（月1～、年6～7） |
| 参加人数 | 子ども6～44人、全体23～135人(2016年～2018年度) |
| 運営費 | 寄付・カンパ及び助成金 |
| スタッフ・関係者 | 地域住民、民生委員、香春町社会福祉協議会、香春町、学生ボランティア |
| 保険 | 『ボランティア行事保険』（社会福祉協議会） |
| 衛生 | 田川保健福祉事務所に届け出 |
| 助成金 | 「H31年度地域ボランティア活動支援の助成事業」（福岡県社会福祉協議会）、30万円 |

図 1 「キッチン小春ちゃん」の運営形態

2.3 「キッチン小春ちゃん」の実態

次に、「キッチン小春ちゃん」の実施状況について述べる。

「キッチン小春ちゃん」は、福岡県田川郡香春町にあり、2016年8月21日から開始され、2020年1月現在まで続けられている子ども食堂である。

これまでのプログラムには、香春町の広報誌「広報かわら」2016年9月、2018年9月の号より、料理教室や工作教室、絵本作家による読み聞かせなどのプログラがあった（香春町役場 2016:p9）（香春町役場 2018:p8）。

筆者が参加した2019年度の2回の「キッチン小春ちゃん」では、子ども達は遊びが、親に対しては交流と休息が重視されていたように思える。というのも、食事ができるまで、広い広間でたくさんのおもちゃとともに遊び、走り、食事ができれば別室に移動、食べ終わったらまた遊ぶ・・・という流れだからだ。その間は基本的に子ども達同紙で遊び、相手はもっぱら、高校生や大学生、近所のボランティアで、親は基本的に端の机と椅子のスペースで一休み。その間、ボランティアが料理を作ったり、協力者から提供されたパンが届いたりしている。（図②「過去5回のキッチン小春ちゃん開催内容」）

| 日時 | 時間 | 場所 | 食事 | その他 |
|-----------|---------------|-------------|----------------|-----|
| 5月30日(木) | 17時~20時 | 香泉荘 | パン・クラムチャウダー | |
| 7月30日(火) | 11時~13時 | フレッシュワークかわら | フルーツポンチ・ハヤシライス | かき氷 |
| 8月29日(木) | 17時30分~19時15分 | 香泉荘 | パン・クリームシチュー | |
| 10月31日(木) | 17時30分~19時 | 香泉荘 | カレー・チキンボールスープ | |
| 1月30日(木) | 17時30分~19時30分 | 香泉荘 | パン・シチュー | |

図 2 過去 5 回の「キッチン小春ちゃん」開催内容

準備が整えばボランティアの呼びかけで別室に移動。紙コップのお茶や紙皿、箸やスプーンを手に取り、並んで座敷でいただきます。会話を花を咲かせ、食べ終われば子ども達はまた駆け出し時間まで遊ぶ・・・といった流れで一回の「キッチン小春ちゃん」は終了します。

2.4 子ども食堂で行われる支援

子ども食堂で行われる子ども支援の形として、厚生労働省は、

- 1) 食育
- 2) 団らんの場の提供
- 3) 地域における居場所の提供
- 4) 貧困に対する支援

の4つを挙げている(厚生労働省 2019)。

上記の体験から「キッチン小春ちゃん」はそのうち2)と3)の面を主に重視するタイプの子ども食堂であると思われる。

『子ども食堂=貧困対策』というイメージを変えるきっかけとして、町内の全ての子どもたちを対象に、居場所づくりや地域交流を目的とした子ども食堂を開設します』(香春町役場 2016)と香春町役場のHPにもあるように、「キッチン小春ちゃん」は貧困の子どもだけを対象とするのではない、どんな子どもでも受け入れる広く開いたタイプの子どもの食堂であり、また子どもだけでなく、親の交流や地域住民や町職員も訪れ、子どもたちと交流することができる、幅広い世代の地域交流の場としてある子ども食堂でもある。よって、「キッチン小春ちゃん」による支援とは、子ども達を中心としながらも、子ども達だけの者ではなく、自分たちの支援、「香春町全体の支援」につながるものであると考える。

3. 「キッチン小春ちゃん」から見える新しい形の支援

従来の「支援」や「ボランティア」は、自分ではない、困っている誰かのために行う者であるという面が強調されたように思える。ゆえに「ボランティア迷惑論」¹など、双方のミスマッチによる問題があった。

しかし「キッチン小春ちゃん」では、地域住民、民生委員、香春町社会福祉協議会、香春町、福岡県立大学教員、大学生や高校生、中学生等の学生ボランティア、スクールソーシャルワーカーなど、香春町の地域住民様々な人の連携で成り立ち、地域交流の場として今に至っている。いわば、従来でいう「支援を行う側」と「支援をしてもらう側」を明確に分けず、それでいて己のできることを行う、誰かと一緒にその場にいる、誰かに寄り添い寄り添い合い、誰かに支えられ支え合う、全員が一体となって行う支援の形である。

また、従来の他人に頼る形である「支援」は注目されたかどうか支援の大小に影響されやすいが、子ども食堂のような、自分たちの手で行う支援は他人の影響を受けづらく、安定した活動を行うことが可能である。香春町の「キッチン小春ちゃん」は地域の拠点、居場所としての面が強い子ども食堂であるがゆえに、子どもの支援だけでなく自分たちの、地域全体の支援につながるものであると認識する。

今回調査の対象となった「子ども食堂」は比較的新しい試みだが、「子どもとともに過ごす」といった点では、昔の家族や地域との交流の復興ともいえるのではないだろうか。2018年の厚生労働白書には『近所付き合いの程度については、1975（昭和50）年から2004（平成16）年までの間、町村と大都市及び自営業者と雇用者の別に見ても、いずれも低下している』（厚生労働省 2018：p33）とあるが、都市や地方関係なしに増加しつつある子ども食堂が、廃れつつある昔のコミュニティの復興、もしくは代替えとして機能しつつあるのかもしれない。子ども食堂の支援を通じて近所付き合いを活性化させることで、地域コミュニティの再形成が行われるのではないだろうか。

各地域の子ども食堂による、新しい形の支援とは、全く知らない誰かのためではなく、地域の子どものための支援が、自分の、地域の、全体のためになるという形の支援ではなからうか。「支援を行う側」「支援をしてもらう側」の区分を緩やかにし、全員が近い場所にいるという支援の形。

子ども食堂という新しい支援がこの先各地域の形としてあるようになるのかもしれない。

¹ 阪神・淡路大震災の神戸でのボランティアが再三、混乱を起こしたという論に帰す、国内の災害現場で散見された、ボランティアが地域に迷惑をかける、あるいはボランティア自身が危険な目に遭うといった事例から(新、2011)

【参考文献】

- ・湯浅誠、2017、『「なんとかする」子どもの貧困』角川新書
- ・「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー実行委員会テキストプロジェクト、2017、「広がれ、こども食堂の輪！活動ガイドブック」
- ・厚生労働省、2019、「子ども食堂の活動に関する連携・協力の推進及び 子ども食堂の運営上留意すべき事項の周知について（通知）」、
<https://www.mhlw.go.jp/content/000306888.pdf>（2020年1月30日最終閲覧）
- ・湯浅誠、2019、「子ども食堂・最新箇所数調査結果発表」、
<https://musubie.org/wp/wp-content/uploads/2019/06/190626%E7%AC%AC%E4%B8%80%E9%83%A8%EF%BC%9A%E3%83%9B%E3%82%9A%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%88-1.pdf>（2020年1月30日最終閲覧）
- ・香春町、2020、「第2期 香春町子ども・子育て支援事業計画 【素案】」、
<https://www.town.kawara.fukuoka.jp/s026/228260069024001580086601/keikakuann.pdf>、（2020年1月30日最終閲覧）
- ・香春町、<https://www.town.kawara.fukuoka.jp/>（2020年1月30日最終閲覧）
- ・香春町役場、2016、「公報かわら平成28年9月号」、
<https://www.town.kawara.fukuoka.jp/s008/info/040/010/028/2809/koho201609.pdf>（2020年1月30日最終閲覧）
- ・二見妙子・建部正夫、2019、『「5. アドボチャイルド活動の報告」福岡県立大学附属研究所障害福祉センター事業報告書2018（平成30）年度報告書』、<http://www.fukuoka-pu.ac.jp/research/img/a88ab69ebc16ad7024965898a0005b4c.pdf>（2020年1月30日最終閲覧）
- ・香春町役場、2016、「公報かわら平成28年9月号」、
<https://www.town.kawara.fukuoka.jp/s008/info/040/010/028/2809/koho201609.pdf>（2020年1月30日最終閲覧）
- ・香春町役場、2018、『公報かわら平成30年9月号』、
<https://www.town.kawara.fukuoka.jp/s008/info/040/010/030/3009/kawara2018.9.pdf>（2020年1月30日最終閲覧）
- ・香春町役場、2016、
- ・内閣府、2019、『国及び地方公共団体による「子どもの居場所づくり」を支援する施策調べについて』<https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/shien/pdf/about.pdf>（2020年1月30日最終閲覧）
- ・内閣府、2019、『「子どもの居場所」づくりに対する財政支援の一覧【内閣府】』、
https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/shien/pdf/1_s1.pdf（2020年1月30日最終閲覧）
- ・内閣府、2019、『「子どもの居場所」づくりに対する財政支援の一覧【九州地方】』、
https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/shien/pdf/2_d6.pdf（2020年1月30日最終閲覧）
- ・社会福祉法人福岡県社会福祉協議会、2019、『平成30年度「地域ボランティア活動支援のための助成事業」 助成決定団体一覧』、
<http://www.fuku-shakyo.jp/jigyo/vo-fund/01vo-fund/2018/08ketei.pdf>（2020年1月30日最終閲覧）
- ・厚生労働省、2018、「厚生白書2018」
- ・文部科学省、2019、「子どもの居場所」づくりに対する財政支援の一覧【文部科学省】、
https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/shien/pdf/1_s2.pdf（2020年1月30日最終閲覧）
- ・厚生労働省、2019、『「子どもの居場所」づくりに対する財政支援の一覧【文部科学省】』、
https://www8.cao.go.jp/kodomonohinkon/shien/pdf/1_s3.pdf（2020年1月30日最終閲覧）
- ・西日本新聞、2019、「子ども食堂 機運高まれ 湯浅誠さんが21日 香春町で講演」
<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/567739/>（2020年1月30日最終閲覧）
- ・七星純子、2019、『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書第345集 pp.13-28 2019年『移動と接触—家族・地域・世代を超える関係形成—』13 2章「子ども食堂」と「居場所」論』、
- ・安富信、2015、「災害報道とボランティア」現代社会研究創刊号
- ・新雅史、2011、『災害ボランティア活動の「成熟」とはなにか』遠藤薫編著「大震災後の社会学」講談社現代新書

4-3. アドボチャイルド協力学生による

「子どもたちに子どもの権利条約を伝えるためのポスター」(1)



『家庭を奪われた子どもの保護』

作成者 社会福祉学科 三島望紗希さん

『休み・遊ぶ権利』

社会福祉学科 瓜生綾佳さん

「子どもたちに子どもの権利条約を伝えるためのポスター」(2)



『少数民族・先住民の子ども』

作成者 社会福祉学科 岡本彩花さん

「子どもたちに子どもの権利条約を伝えるためのポスター」(3)



『第 13 条 表現の自由』

作成者 社会福祉学科 三雲絵梨子さん

Ⅲ 教育研修事業部門

1.ペアレントトレーニングを応用した特別支援教育スキルアッププログラム

①事業組織

事業代表者 小山憲一郎（人間社会学部 講師）
事業分担者 福田恭介（人間社会学部 特任教授）
中藤広美（人間社会学部 助教）

②事業資金

福岡県立大学附属研究所費

項目：＊「ペアレントトレーニング研究推進事業」運営費（620,000円）

＊お父さんとお母さんの学習室（ペアレントトレーニング）、おもちゃとしゃか
ん・たがわと共通経費

| | | |
|---------|------------|--------------|
| 参加者実費負担 | 1部、2部とも受講者 | 1人あたり 5,000円 |
| | 1部の実受講者 | 1人あたり 3,000円 |

③主催団体・共催団体

主催：福岡県立大学附属研究所 生涯福祉研究センター

④事業の目的

子どもの問題行動を考える場合、それを無理してやめさせるよりは、それに代わる適切な行動を身につけさせるように支援していくことがより効果的だと言われている。これまでわれわれは、ペアレントトレーニングに取り組み、子どもの問題行動の改善を目指して保護者とともに取り組んできた。そこでは、一番改善したい行動を具体的に決め、その行動を観察・記録していくことで、対応策を考えていく。このようなペアレントトレーニングの取り組みは、保育・教育現場における特別支援教育にも応用可能だと考え、これまで蓄積してきた多くの対応策を教師や保育士とともに共有することでスキルアップしていくことを目指した。

なお、2018年度より1部の講義のみの参加を可能とし、多くの受講者が参加しやすいよう配慮をしている。

⑤事業の内容

- ・受講者 のべ165名
- ・開催日および内容

5月31日（金）各回とも18:30～21:00（18:00受付）

1部「ペアレントトレーニングの実際と特別支援教育への応用」

講師：福田恭介

2部 事例検討：自己紹介と取り組みたい事柄を決定

講師：小山憲一郎、福田恭介、中藤広美

6月14日（金）

1部「観察と記録の仕方」 講師：小山憲一郎

2部 事例検討 目標行動の設定、記録の仕方の検討

講師：小山憲一郎、福田恭介、中藤広美

6月28日（金）

1部「環境の整え方と手助けの仕方」 講師：中藤広美

2部 記録に基づいた検討

講師：小山憲一郎、福田恭介、中藤広美

7月12日（金）

1部「困った行動を減らし、望ましい行動を増やすには」

講師：小山憲一郎

2部 記録に基づいた検討

講師：小山憲一郎、福田恭介、中藤広美

7月26日（金） 事例発表会

| 2019年度 スケジュール | | | | | |
|---------------|----------|-------|-------------------------------------|-----------|--------------------------------------|
| | | 18:30 | 19:30 | 21:00 | |
| | 月日 | 10分 | 講義と質疑応答 50分 | 休憩 10分 | グループワーク 80分 |
| 1回 | 5月31日(金) | 事務連絡 | ・講義:ペアトレの実際と特別支援教育への応用 ・質疑応答 | | ・グループワーク ・自己紹介 ・困ったことの共有 など |
| | | | 講義と質疑応答 50分 | 休憩 10分 | グループワーク 90分 |
| 2回 | 6月14日(金) | | ・講義:観察と記録の仕方 ・質疑応答 | | ・目標行動の設定 ・記録の仕方の検討 |
| 3回 | 6月28日(金) | | ・講義:環境の整え方と手助けの仕方 ・質疑応答 | | 記録に基づいた検討 |
| 4回 | 7月12日(金) | | ・講義:困った行動を減らし、望ましい行動を増やすには ・質疑応答 | | 記録に基づいた検討 |
| 5回 | 7月26日(金) | | ・事例発表会 ・質疑応答 *適宜休憩 | | |

2. 筑豊英語教員フォーラム

①事業組織

事業代表者：I.S.Gale（人間社会学部 准教授）

②事業資金

特になし

③主催団体・共催団体

主催：福岡県立大学附属研究所 生涯福祉研究センター

④事業の目的

1. 筑豊地域で英語教育（中学校～高等学校）に携わっている日本人教員の実践的英会話能力、特に英語でのディベートの能力を向上させる。
2. ネイティブスピーカー（本学教員、ボランティア参加の ALT）と英語で議論させることにより、日本人教員の英語の発音を矯正していく。
3. 地域で孤立しがちな ALT と、中学校・高等学校の英語教員との連携ネットワークを構築する。また、これを通して ALT の日本語能力を培う。
4. 将来的には、本学の英語教育プログラム、特に英語圏への語学研修プログラムとの連動を構想したい。

⑤事業の内容

日 時：2019年4月～2020年3月

毎週 火曜日 18:00～20:00

場 所：3号館 LL 教室

ファシリテーター I.S.Gale（福岡県立大学人間社会学部 准教授）

対象者：筑豊地域で英語教育に関わっている者、英語教育・英会話に関心を持つ者

内 容：各参加者が近況について簡単なスピーチを行う。その後、興味深いテーマがあれば、全体で討議を行う。原則として全て英語。

参加者：高等学校教員、本学教員、一般市民、福岡県立大学学生など

参加者：のべ 330 名

IV その他の事業

1. 筑豊市民大学（第18期）

主 催：筑豊市民大学

共 催：福岡県立大学附属研究所（主担当：生涯福祉研究センター）

内 容：講座コース、ゼミコース

1) 講座（聴くアラカルト）

2) ヘルシーエイジング

3) 中高年里山歩き

4) 筑豊郷土史

報告書作成 『第19期筑豊市民大学報告書』（2020年3月）

編集委員

二見妙子（人間社会学部 助教／附属研究所 生涯福祉研究センター 専任研究員）
中藤広美（人間社会学部 助教／附属研究所 生涯福祉研究センター 専任研究員）
住友雄資（人間社会学部 教授／附属研究所 生涯福祉研究センター長）

福岡県立大学 附属研究所
生涯福祉研究センター事業報告書 2019年（令和元）年度

2020年9月30日 発行

編集・発行：福岡県立大学 附属研究所
〒825-8585 福岡県田川市伊田 4395
Tel:0947-42-2118 Fax:0947-42-6171
<http://www.fukuoka-pu.ac.jp/research/index.html>

作 製：よしみ工産株式会社
〒804-0094 福岡県北九州市戸畑区天神 1丁目 13番 5号
Tel:093-882-1661 Fax:093-881-8467
<http://www.e-yoshimi.jp/>
